

6か月を振り返って

— 合宿型若者自立プログラム修了を迎え —



合宿型若者自立プログラムが修了し、1月14日に卒塾の会を行いました。

訓練生がプログラムで学んだことや自分の成長を作文にして発表し、担当のスタッフからは一人一人のこの半年間での成長とこれからの激励のメッセージが書き込まれた卒業証書が訓練生に向けて読み上げられました。作文やメッセージなど言葉づくしの3時間でしたが、訓練生のこの半年間の率直な思いと成長の報告に、誰もが聞き入る3時間となりました。ここに思い切って訓練生全員の作文をご紹介しますことにいたしました。ぜひお読みください（※校正を入れず、本人の入力した文章をそのまま掲載しております）。

こうした成果を上げている合宿型のプログラムが今回で最後になってしまうのが本当に残念でたまりません。

六ヶ月前の自分を振り返ってみると、自立はしたい。しかし社会の中でやって行けるのか不安があり、何より自信が無い自分がいました。高校を卒業ギリギリの単位、出席率で卒業し進路に悩む私に、高校でお世話になった先生から「お菓子の専門学校に行っても続けて行けるか心配でしょ？良かったらこういう所があるから行ってみたらどう？」と風のすみかを紹介していただきました。家から出るのもやっとだった自分には六ヶ月も知らない人たちと寮生活をしながらパン屋の仕事をしていくことに最初は不安がほとんどで乗り気でもありませんでした。

私は人と接するとき、その人の見た目や第一印象で、勝手に「こうだ」と判断し決めつけてしまう所があります。たった一面しか見えていないのにそれだけで好きだとか嫌いだとか決めつけ、そのひとの他の面を見ようとしないうちがいました。

自分は人とコミュニケーションを取る時自分の過去を人にさらしたくない。だからその話題が出ると面倒なので近寄らないでオーラを出したりもしていました。それでも話さなければならぬときはあり、そんな時は偽りの話を作り人と付き合っていました。会話がはずみ気の合う人が出来ても偽って接し苦しくなったりもありませんでした。

私は小さい頃に母が他界し、それ以来周りが冷たい気がしました。母が居ないだけで、軽蔑され自分は恵まれてないと考え生きてきました。母なんて居なくても生きていけると強がっていた

時期もありました。しかし最近では自分の中で整理できて来て隠す必要はない。母が亡くなって考えさせられたこと感じたこと成長したことがあって、母の死自体、色々あり複雑で凄く整理できるまで時間がかかり、難しい問題でした。整理できたのはヒミコさんの丁寧な面談のおかげでした。

私が悩んでいることや改善すべきところは私より分かっている改善の為、一生懸命にサポートしてくれる人がいる。こういう出会いがある自分は恵まれているなと思いました。

すみかの仕事を通し、こんなことも学びました。

私は就労支援としてのパン屋という見方で最初は風のすみかを見ていました。ある日、配達準備中に自らの不注意でパンを落としてしまい沢山のパンをダメにしまいました。しかし、その時あまり反省の気持ちがあきませんでした。謝罪の言葉さえなく正直仕事もやる気が起きませんでした。パンを落とした日、スタッフ（ヒミコさん）に「何故すみません。の一言もなかったの？」と指摘されました。そのとき私は「こう答えました。風のすみかの仕事は甘いしい加減それに厳しくしなすぎ。私は素直になれないこと、否定されると反抗的になるのも問題点の一つでした。

しかし、翌日を境に（風のすみかは特別なパン屋、機関）という思想は大きく覆されました。それは朝早くに自主的に（前日に指摘もされたため）パンを落としたり反省も少し含まれますが）お店前の落ち葉を掃除に行った際、掃除中に

工場長の豊さんが出ていらして(パンの成型やってみる?)と、この時初めて成型をさせていたいただきました。まさに商品をつくっている最中。ピリッとしていて厳しい工場長。早朝から働く職人さん。これがすみかなのか。これが働くという事なんだ。パンを落とし何も思わない自分が許せなくなりました。その日の午後、工房から店舗を除くと朝自分が作ったパンが並ぶ棚をみて笑顔でパンを選び買ってくれるお客さんの姿がありました。そのとき喜びを初めて感じたのと同じに適当な気持ちで仕事しちゃいけないという思いが芽生え風のすみかは立派なパン屋なのだと思います。この出来事がキッカケとなり物をつくる楽しさ素晴らしさを知り、悩んでいた製菓専門学校に進むかが決まりました。お客さんの笑顔のためなら頑張れる、やはり、将来は絶対パティシエになるんだと強く思うようになりました。

次に、こんな経験も合宿中に出来ました。

私は人と接するとき人の反応に敏感になってしまいちよとしたことで嫌われたのではないかと考えてしまうことがあります。その課題を克服するためにインターンシップで外に研修に行かせてもらいました。そこで働いている人に一日目で恐怖を感じもう行きたくないと思ってしまうました。しかし、ヒミコさんにアドバイスをしていたときながらイヤイヤ行くうちに、あ。苦手なあの人がこういう意外な一面もあるんだなど感じる瞬間があつて(怖い人)のイメージは無くなつていきました。その時、人は一面ではわからない。いろんな角度から見ないとなど感じ少し前進し

たと思いました。

しかし六ヶ月で改善出来なかったこともあり、声が小さい事。人見知りなこと。なので今後は必要以上に人と接する機会を作りたいと思います。

今までお世話になった、支えてくださった、スタッフの方々すみかの方々地域の方々そして寮生六人に感謝に気持ちいっぱいです。すみかでの毎日は私の一生の宝物です。

(一九歳・男性)



私は小さい頃から、自分に自信がなく、傷つきやすい性格でした。人に注意を受けたり、冷たくされたりすると、そのことでもショック

を受けていました。そしてそういう人に出会うと、その人を嫌いになったり、避けたりしていました。そんな気持ちが段々強くなっていき、いつしか人の悪い面ばかりが見えてしまうようになっていた。そして人と関わっても良いことなんてないとか、自分は人と付き合うのが苦手だとか思うようになり、人と関わるのが嫌になり、家に引きこもってしまいました。

そんな状態をなんとかしようと思い、サポステに通っていたら、合宿型若者自立プログラムを紹介され、参加することにしました。

プログラムに参加し、一日の殆どを、一緒に合宿に参加したメンバーと過ごすことにより、人の悪い面ばかりでなく、良い面を見る目が養われました。最初は苦手と思っていた人も、その人の良い面を見つけ、その人を素晴らしい人と思うことで、段々その人のことを受け入れられるようになり、尊敬できるようになりました。人には良い面も悪い面もあつて当たり前、そして自分にも良い面や悪い面があつて当たり前と考えられるようになりました。自分に自信が無かったのは、自分が自分自身の悪い面を受け入れられていなかったからだと気付いた。自分が自分を許し、自分が自分を認めることで、以前より自分のことを好きになり、自分に自信を持てるようになりました。また、人の悪い面を見たときも、それがその人の全てではないと考えられるようになり、それだけでその人を判断することがなくなり、人に冷たくされたりしただけで、傷つくこともなくなりました。人を多面的に見ることができるようになった。

仕事の面では、報告・連絡・相談といった仕事

の基礎から、自分から仕事を見つけることや、流れを考えること、周りをみることに、自分が作業する場所を作ること、効率良く作業する方法など、パン屋以外でも生かせることをたくさん学びました。

すみかでの研修で一番心に残っているのは、NPOフォーラムです。自分達で売りに持っていくパンを決め、成形も参加し、売り方も自分達で考え、そして自分達の手で直接売るといふ、貴重な体験をしました。合宿メンバー一人一人に役割があり、六人が一つの目標に向かって力を合わせました。自分達が作り上げたイベントだけに、とても強い想いでパンを販売することが出来ました。

NPOフォーラムを通じて、人が協力することの大切さや、人が集まって一つのことに向かった時に発生する、それぞれの想いの集合体の大きさを感じた。この大きな想いがお客様に伝わった結果、パンを完売することが出来た。とても大きな達成感や喜びを味わえ、自分が作ったものを自分で売り、お客様に食べて頂くことの喜びを知ることが出来ました。

すみかでは、仕事が終わると、毎日一人一人が一日の自分の仕事を振り返り、そこで反省点や、それについて自分がどうすれば良いかを話し合いました。振り返りをする中で、仕事の仕方や効率を考えるだけでなく、自分自身を見つめ、自分と向き合うことが出来ました。

この他に仕事の面で大きかったのは、外部研修で、パン屋以外の場所で働けたことです。初めていくレストランや工場で働いても、その職場の人と楽しく接することが出来たし、積極的に質問

したりすることが出来た。この経験のおかげで、働くことに対する自信がきました。

この六か月間全体を通して一番感じたことは、人は人と接することで成長していくということ。人と接し、注意されたり、注意したり、褒められたり、褒めたり、一緒に笑ったり、一緒に何かを成し遂げたりして、人は成長していくと思っ

た。だから私は、これからはなるべくたくさんの人と出会えて、たくさんの人と関われる環境に身を置きたいと考えています。私は店舗や外での販売の仕事が好きなので、まずは販売や接客の仕事をして、そこからステップアップして、何か人と関われる仕事をしたいです。そして人として少しずつ成長していきたいです。

(二一歳・男性)



私は、この四半世紀、様々なものから逃げてきました。人間関係、就職、勉強、どれだけ逃げてきたか思い出せないくらい逃げました。「風のすみか」でお世話になる前は、この「逃げる」という習性が原因で、困難に立ち向かい、達成感を得る機会が少なく、その結果として、自分に自信を持つことができませんでした。自信の有無というのは、とても大きく、それは態度に出ます。私の場合は、「話しかけないでくれ」オーラを張ります。なぜなら、話すと、自分の未熟さが浮き彫りになるからです。社会の何処にも所属していないことへの不安や焦りは大きく、以前の私は、このオーラをかき消すことはできませんでした。

しかし、六ヶ月間、「風のすみか」での実習を積み重ね、課題を発見し、克服するために意識して努力をすることを繰り返してきました。外販での積極的な売り込みや他人に作業を教えるなど今まで到底出来なかったであろうことが徐々にではあるが、出来るようになることが、とても新鮮な感覚で、自信を取り戻すきっかけになりました。

この六カ月は、振り返ってみれば、時間が過ぎるのが早く、とても短い六カ月でした。それは、それだけ毎日が充実していたことを表しています。「風のすみか」での仕事では、指示出しや研修生の指導など、時にはプレッシャーのかかる役割も経験しました。また、外販は、人に対する苦手意識を払拭するのに最適で、何度も数をこなすうちに人に対する恐怖心が緩和されたように感じます。こういう自分にとって難しい仕事をうまく乗り越えたときに、六カ月前からの成

長を感じる事ができました。六カ月前、一人で考え込み、結局何も導き出せないまま一日が終わり、目標も持たず、ただ漫然と日々を過ごしていた生活とは大違いでした。

本プログラム中には、数々のイベントがありました。マラソン大会では、暇を見つけて練習し、NPOフォーラムでは、責任のある役割を任せられ、二ローネ研修では、土と戯れ、外部職場研修では、それぞれの職場で精一杯がんばりました。ここに来る以前のイベントでは、ほとんどノータッチで非協力的な態度で参加してきました。しかし、ここでのイベントでは、六人で納得のいくまで話し合い協力してきました。その結果、仲間の絆も強まり、完全燃焼することができました。

このプログラムに参加して、人を見る目が変わりました。人は完璧などではなく、デコボコしていて、得意不得意があつて当たり前です。私は、これに気づくのに多大な時間を要しましたが、大分気が楽になりました。これからはもっと人に関心を持ち、接していきたいと思えます。

年も明け、六カ月に及んだプログラムも終わりを迎えました。この六カ月に劇的に何かが変わったとは思いません。長きにわたり、数多くのことから逃げ続けてきた自分の性格はそう簡単に変えられません。ただ、良い方向に向かうための土台くらいは作れたかと思えます。逃げた分だけ元の地点に到達するのに時を要します。次に逃げ続けた場合、今回到達した地点に六カ月で戻るのには難しいと思えます。このことを肝に銘じて、卒後は、覚悟を決めて、すぐに行動をおこし、行動しながらその後のことを考えていこうと思っています。それにはまず、退路を

断ち、「やってもいいかな」あるいは、「嫌ではないかな」という仕事を探してみます。

最後に、どんなに立派に見える人でも高い壁にぶち当たり、それを何度も乗り越えてきています。私を、今回のプログラムで外に出れたことを無駄にしないためにも自分の殻に閉じこもらず、引き続き外の世界で挑戦していきたいです。

(二五歳・男性)



ここに来る前僕は、いわゆる引きこもりだった。しかも長期の。大学受験の失敗や父親の問題その他のいろいろなことが同時に起きたことなどが理由として考えられるけど、それは表面的に過ぎずもっと深いところにあった他人の目に対する過剰な意識や人と深くかかわることに対する恐怖から逃げたいという意識が表面的な理由が引き金となつて、引きこもりという形で顕在化した

のかと思う。

とはいえ今となつてはこうなつた理由は、わか

らない。家にこもつて最初の方は漠然とした怒りや不安焦りといった感情がぐるぐると頭の中を巡っていたように思う。

ただ僕はその感情と向き合い乗り越えようとはせずに排除し逃げようとした。それらの感情を想起させ増幅させるもの、例えば心配してくれて訪ねてきてくれた友達を避けたり、好きだつた音楽も聞かなくなつたりした。

その後は誰ともかかわらず社会との接点が絶たれた中で変な言い方だけど心穏やかとか感情のふり幅が小さい生活を送っていたと思う。たまに襲ってくるような不安や絶望的な気持ちもやり過ぎず方法を身につけていった。そして無為で非生産的な時間だけが流れていった。

こうして完全に身動きが取れなくなつた僕は半ば引きずられるようにして兄にサポステに連れてこられた。サポステの面談では過去・現在・将来のことを話したり、自分の生活を記録して客観視することで改善していくというようなことやつた。

それでも何をやつても無駄、もう遅いというような厭世観を拭えないでいた。そんな時にこの合宿型プログラムを紹介された。最初は乗り気ではなかったけど断つたらもう面談してもらえないかもしれないとか当時唯一の楽しみだったフットサルに行きづらくなるのかかなり消極的な理由で参加を決めた。ただそんな理由でもやろうと決めたのは何とか今の状況から抜け出したいという気持ちがあつたのだと思う。始まるころには

何も考えずとりあえずやってみようという気持ちになつていた。そしてプログラムが始まった。

最初は夜型生活から朝型への改善や初めて会ったメンバーとの共同生活、またすみかでの仕事など覚えたり、慣れたり、変えたりしなければならぬことが多くても何も考えないというより考える余裕がなく過ぎて行つた。しかし三か月ぐらい過ぎ仕事にも共同生活にも慣れてき頃またこんなことをやっても意味がないんじゃないかと自分が変わってもこの状況は何にも変わらないんじゃないかという考えが僕の頭を支配してきた。必死に集中して打ち消そうとしてもその考えはなかなか消えなかった。しかし、ひみこさんとの面談やプログラムなどを通じてその思いは徐々に改善していった。けれど一番大きかったのは同じ寮のメンバーの存在だった。仕事・寮と常に一緒にいて関係が深くなるにつれて彼らもそれぞれ深い悩みや苦しみを抱えていることを知った。それでもそうした課題に懸命に積極的に取り組み乗り越えようとする姿を見て、誰かや何かのせいにして自分で自分だけと被害者面して何にもしないことを正当化して、結局は怠けていただけなんだと気付かされた。それから彼は彼らに負けず自分も変わらなければと意識だけは積極的に前を向いてまじめに取り組んでいこうと素直に思えた。たとえそれで今の状況が変わらないとしても。

その思いはマラソン大会やNPOフォーラムなど関係が深まるにつれて大きくなっていった。

そしていよいよこのプログラムも終わりに近づいてきた。振り返ると最初は絶対できないと思つていたこと、例えば一人で外販に行くとか生地

の分割とかも何とかできるよになつていた。

このことは最初からできないと諦めるのではなくコツコツやっていたら何とかなるという今後別の仕事をする上でも大事なことを教えてくれた。

また寮での生活を通じて人と話すことの楽しさを思い出し人とコミュニケーションをとるということに対する不安は少しは解消したと思う。本気で笑ったことや、たまには本気で頭にきたこともあったけどこれも人とつながっているからこそだと思ふ。

最後に正直終わつたら元の生活に戻るんじゃないかという不安やネガティブで投げやりな気持ちがなくなくなったわけではない。ただ昔は支配的だったそういう気持ちたちが薄まってきたのも事実で今後は積極的な部分を大事にしながら他人との比較ではなく自分自身を認めることが出来るような生き方をしていきたい。

(三二歳・男性)



私は教師の体罰が元で、私立高校を三ヶ月で

退学しました。次の年の四月に、兄が一流といわれる国立大学にストレートで合格したのですが、その頃は二偏差値が高い人ほど偉いという時代で、偏差値の低い高校を退学して大検を目指している自分と、大学に行っている兄を比べて強い劣等感を持ち、そのストレスを母にぶつけては自己嫌悪に苛まれる毎日でした。元々人と接したりするのが苦手な子供でしたが、十代後半のこの時代に自己否定しか出来ない卑屈な人間になつていったと思います。

その後、専門学校に入ってからはこのままではいけないと思い一生懸命頑張りました。

しかし、社会人になってからは複雑な人間関係の中で上手くコミュニケーションがとれなかったり、退職者が相次ぎ労働条件が悪化したりして、最初は無我夢中に頑張つていても、数ヶ月すると精神的にも肉体的にもボロボロになり退職をして、退職した自分を自分でぼろくそに責めて、ということを経験の度に繰り返して、どんどん自己否定や対人恐怖を強固なものにしていきました。

合宿に参加する前にもカウンセリングには通つていましたが、自己否定、卑屈な心、劣等感、コミュニケーション能力不足、対人恐怖、一生懸命や夢中になると周りが見えなくなる、などの欠点は、カウンセリングと自分自身の「とにかくがんばる」という気持ちだけではどうにもならないと思ひ、合宿プログラムに参加しました。

六月二十七日から合宿が始まりましたが、

私はできるだけ早く打ち解けたかったので、初日からカイカイワールド全開で突っ走りました。(カイカイワールドとは親父ギャグを始め、独特な言動やテンションで周囲を苦笑いの渦に巻き込むことです)もちろんそのせいだけではありませんが、結構早い段階で寮生同士が仲良く慣れたと思います。

合宿生活が始まり、まず最初に思ったことは、「苦しんでいるのは自分だけではないんだ」ということです。すみかの振り返りや寮でのミーティングで、「今までどうだったか、これからはどうなりたいか。」についての話をしました。合宿に参加する前は「苦しいことやつらいことがみんなあるのは分かっているけど、だからといって俺の苦しさが減るわけじゃない。」という風にしか感じられなかったのですが、知り合って数日しか経っていないのに合宿の仲間の話を聞いていると、なぜかは分かりませんが、「自分は一人じゃないんだ。」と思えて気持ちがスッと軽くなるのを感じました。そのことがあってからは卑屈な心と対人恐怖が少し薄らぎました。

八月にパソコン講座があり、十月に希望者のみのパソコン検定がありました。合格するために、講座以外にも寮生の**くん**に頼んで、毎日三十分くらいパソコンを借してもらい練習した結果、演習問題も大分楽に解けるようになり、試験日の一週間位前には「俺、合格できるんじゃないか。」と思うようになり、「こういう感覚が自信というものなんだ。」と三十二年間生きてきて、初めて自信というものをすることができま

した。検定も無事、合格することができ、皆さんに「おめでとう」と言ってもらえてとても嬉しかったです。

十一月にはリレーマラソン大会がありました。最初は出場するかしないかから始まり、六人全員で走るのか、マラソン大会の意義などを何時間も話し合いました。練習以上に話し合いがしんどかったのですが、話し合いをしたことにより、今まで以上にお互いの事が分かり合え、より、結束が固くなりました。当日に完走出来たときには、一人では味わえない達成感がありました。

パソコン検定やマラソン大会などの成功体験をする事で、自己否定や劣等感といった後ろ向きな気持ちだけでなく、ほんのわずかですが自信や自己肯定といった前向きな気持ちを持つことができるようになりました。

この前向きな気持ちと、自分は一人じゃないと思える仲間やスタッフ、ユースやリンク、外販チームなどの方々の存在が、私がこの合宿で得た最も大きなものです。

コミュニケーション能力の低さや、一生懸命や無我夢中になると周りが見えなくなったり性格が荒くなってしまう事に加え、ひみこさんの面談で、自分の能力の限界を超えているのに無理にやらなくてもいいことを抱え込んで、グチャグチャになって自滅してしまう。という課題も新たに気づくことが出来ました。

残念ながら、この三つの課題については、大きく改善させることが出来ませんでした。

しかし、合宿前では「これができない。あれもできない。だから自分はダメ人間だ。」で終わってしまっていたのですが、合宿が終了した今は、コミュニケーション能力の低さや、無我夢中になると周りが見えなくなるといった、自分の短所や欠点を自分の課題として受け止めて、それを改善するためにはどうすればいいかを考えるようにはなり、又、能力の限界を越えそうな時には、周りに状態を説明して、自分一人でどうにかしようと思わずに助けを求めて良いんだ。ということを教わりました。

そして、過去に会社を何度も辞めてしまいましたが、自分なりに振り返り、問題点だけでなく、自分のできることも確かめられました。

この半年間には、過去の自分を振り返ったり、行事のまとめ役など慣れないことをして、しんどい時もありましたし、一生懸命になりすぎて人に迷惑をかけてしまい、反省することも多々ありました。しかし、自分にとって、この半年間は、本当に充実したかけがえのない日々だったと思います。

これからは合宿で学んだことや得たことを総動員して、いまずぐというわけにはいかないでしょうが、あせらずに少しずつ成長していき、いつか自分自身を誇れるようになり、社会に居座れる人間になりたいと思います。



僕がこの六ヶ月間を振り返って改めて感じたことは、問題に気付いたとしても、自分の中で本当に変えようという強い意識を持って取り組まないで、どんなにそれが正しいことであっても、どんなに周りの人からこうした方が良いよと言われても、変えることは出来ないということ。風のすみかでは、実地研修を通して豊さんと日美子さんに日々の振り返りや週一回の総括ミーティングをしていただき、気が付ける点はたくさんあったはずで、その機会にも恵まれた環境でした。

僕は、最初の二ヶ月間は「仕事」というものに対して真剣に取り組んでいます。これは日美子さんと二回目の面談をしていただいた際に課題として明らかになっていたので、心までは届いておらず、真摯に取り組み切れていなかったのではないかと感じています。また、合宿型プログラムでは、パソコン検定やリレーマラソン大会等々、日美子さん達が僕たちのことを考え

てくれながら数々のイベントや目標を仕掛けてくださいました。それにもかかわらず、肝心なところで練習を頑張りきれない自分がそこにいました。特に、リレーマラソン大会への参加は貴重な体験となりました。言い訳癖で全く練習もせず真剣に取り組み切れていなかった僕をリレーマラソン大会に出場させるべきかどうかのミーティングでは、やはり物事に対して真剣に取り組めない、仲間から受け入れられないということを実感しました。反省の意を合宿生全員に伝え、完全に納得してもらえたという訳ではないものの、当日は合意の下、一区間の参加を許可してもらい、合宿生六人揃って完走するという思い出を作らせていただくことが出来ました。その後は何事にも真剣に取り組むように改善して、寮生活や風のすみかでの共同実習を通じて、みんなでひとつの物事に対して協力して取り組むという意識を持てたのではないかと僕は感じています。僕は以前に就労経験があるので、その時には感じるものが出来なかった想いで

す。頑張るということは、僕の中では他の誰よりも大切なことだと頭ではわかっているはずなのに、いつも人や物のせいにして言い訳を用意しながら可能な限り楽な方を選択し、何度も投げ出し甘えてきました。気が付けば、物事が達成出来なくても、頑張っていないから当たり前だと思うようにして、自分の中で問題をすり替えて納得する癖がついてしまっていました。その頃には僕はすでに、感情を抑え込み感じる痛みを減らしながらずうずうしく会社等といった集団の中に居続け、自分を守るための術を身に付けていまし

た。

そんな僕に変わるきっかけを与えてくれたのが、お楽しみイベントとして合宿生で企画したバーベキュー大会でした。僕は、バーベキュー大会当日、ただ食べるだけで調理の手伝いなどもせず、遊ぶ時だけは存分に遊び、後片付けもろくにしませんでした。その後の三回目の面談で、呆れ果てた日美子さんから僕が集団の中でいかに働かなく、役割を担っていないかを指摘していただきました。それからは、僕なりにとにかく風のすみかでの仕事はもちろんなこと合宿型プログラム全般に打ち込み始めました。その甲斐もあってか、十月に行われたブルーベリージャムづくりやその後のNPOフォーラムでは、いままでの取り組み不足を反省し、各自が決められた役割を果たす中で僕もその一員として働き、合宿生全体として良い仕事と楽しい思い出が作れたのではないかと思っています。バーベキュー大会は、僕のこの三十数年間の人生の中で一番楽しかったと思えるほどの重大イベントだったので、日美子さんの言葉が骨身に染み込んだのだと思います。

それほどに僕にとって頑張ることは、人よりも出来ない自分を本当に受け入れ、自分を甘やかすことなく生きていかなければならないという、とてもしんどいことでした。

ここまではいけないと思い、練習を怠ったために合格することが出来なかった。パソコン検定の再受検を決め、現在練習中です。

この合宿を通してこれまで自分を甘やかしていた点を見つめ直して頑張ってみた結果、五ヶ月目で見事にC・c・a・f・e殿での外部研修に出させていただきました。そこでは、僕がどれだけ風の

すみかでの研修を頑張るように改善しましたとはいってもそれはあくまでも自分の中だけのものでしかなく、一步風のすみかを離れてしまうと社会の中では通用しないという現実をまざまざと思い知ることになりました。そうはいってももちろん収穫もあり、いままでの僕は頑張ることを避けていたため気が付くことの出来なかつた、「悔しい」という感情を思い出すことが出来ました。この悔しいという感情は、僕が当時新入社員として入社したとき以来なので、十数年ぶりに取り戻したことになります。これまで僕は、自分なりに精一杯頑張った結果が評価につながらないと、それに耐えられなくて向き合うことを避けてきました。しかし、それでは社会に通用しないというのに改めて気が付くことが出来たので、今後は自分を甘やかすことなく自分と向き合っていくことが必要だと感じました。苦い思い出でもありますが、本当に貴重な経験となりました。

前述のようなこともあり落ち込むことも多かったのですが、そんな僕の支えになってくれたのは、寮生活という同じ環境で生活を共にした合宿生や寮長でした。風のすみかで同じ仕事をし、時が経つにつれお互いの意見などを言い合えるようになり、自分なりの課題を周りに表明し、共に取り組むことが出来ました。いまではかけがえのない仲間達です。

寮長の渡辺さんには、僕のいびきが言葉では表現し難いほど酷かったため大変ご迷惑をかけたしました。にもかかわらず、僕が合宿型プログラム参加当初から抱えていた、人と話したいという欲求に付き合ってくれました。また、寮の中の

ことはもちろん、寮以外のことについてもいろいろとアドバイスをくれ、寮や日々の生活がより快適になるように常に考えてくれていたことに對して感謝しています。

僕がこのプログラムへの参加にあたっての目標のうち一つは体力面でしたが、六ヶ月前と比べれば成長したと思います。また、もう一つの目標であったコミュニケーション能力の強化の面も、まずは自分が出来る限り頑張り、率先してチームに貢献出来るようにしていけばおのずと信頼もついてくるのではないかと、いう手応えを感じる事が出来ました。

この合宿型で手に入れたものは、目標が遠くても諦めないで少しずつでも向かっていくことです。強い意志を持ち、努力を続ければ、完全じゃないにせよ自分がなりたいと思える自分に近づけると思えるようになってきました。僕にとっこの六ヶ月間は、長いようであっという間でしたが、楽しかったただけではなくいろいろなこと気が付くことが出来たことが大きな収穫でした。

今後の方針にですが、就労経験を活かしての正社員登用をゆくゆくは目指したいと考えているので、現在の實力不足を痛感し、将来的な資格の取得も視野に入れ、活字を読む練習を始めました。また、体力を維持するために、朝は早起きして散歩に取り組んでいます。その上で、ハローワーク三鷹の中田さんに協力していただき、自己PRと志望動機を整理しながら、いまままで希望していた製造業の枠に捉われることなくアルバイトを受けてみようと考えています。就職活動に参加するということには、この合宿型プ

ログラム参加前には取り掛かることすら出来なかつたことです。僕なりに着実に社会復帰への第一歩を踏み出したのではないかと思います。

合宿を締めくくるにあたり、今後取り組んでいこうと思っていることは、何事に対しても誠心誠意努力していくことで、僕では理解出来ない諦めないで取り組んでいくことです。今後、もしもまた集団に属する機会に恵まれれば、自分だけが楽や得をしようとしなくて自分の役割を果たせるように努力し、周囲に損をさせないことを心掛け、一緒に働いて良かったと思われたいと思います。

また、あまり考えずに発言し矛盾が生じてしまったり、あるいは他人と物事の捉え方が違う等のギャップを感じることも多いので、もう少し自分のことを深く掘り下げて考えるような取り組みをしていきたいと考えています。

学びながら生きていくことの大切さと喜びを少しでも感じられればと思います。

僕を送り出してくれた上、六ヶ月間温かく見守り応援してくれた友人達に感謝します。

(三八歳 男性)

